

大阪駅周辺・中之島・御堂筋周辺地域都市再生緊急整備協議会会議

大阪駅周辺地域部会

第2回 うめきた2期区域まちづくり検討会 会議要旨

1. 日時：平成26年8月7日（木）15：30～17：30

2. 場所：大阪市役所 5階 大応接室

3. 出席者

〈委員〉

東京都市大学教授、横浜国立大学名誉教授（座長）

小林 重敬

大阪府立大学大学院教授

増田 昇

ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長

室崎 益輝

大阪府立大学特別教授・大阪市立大学特任教授

橋爪 紳也

都市再生機構西日本支社長

伊藤 治

伊藤滋都市計画事務所 パートナー

長島 俊夫

大阪府住宅まちづくり部理事

井出 仁雄

4. 議事次第

（1）開会

（2）委員紹介

（3）議題

・まちづくりの方針について

・その他

（4）閉会

5. 会議要旨

議題について、事務局より優秀提案者との対話内容の報告を行い、対話を踏まえたまちづくりの方針について議論を行った。議論の要旨は以下のとおり。

【まちづくりの目標について】

- ・「みどり」にかかる表現は、時間軸の視点を組み入れた方針化や次世代に引き継ぐといった表現がよい。
- ・「みどり」については、今までにないようなものという表現の方が、この開発の特異性、創出性を表現しているのでは。
- ・国際競争力の強化に寄与するイノベーション創出拠点という表現は、全く新しい競争力を獲得するくらいの表現にしても良い。

- ・イノベーション創出拠点については、国際競争力のある世界的な拠点を創ることを強く打ち出し、大阪が日本を担うくらいのスタンスで表現してほしい。

【中核機能について】

- ・対話のなかで挙げられた新産業創出、人材育成、国際集客、交流機能などの分野は、今の段階で分野を絞り込む必要はない。

【「みどり」の配置・規模について】

- ・「みどり」の定義を明確に示す必要がある。また、「みどり」はこれまでにない新しい「みどり」の考え方を提示すべき。
- ・接地性のあるみどりはわかるが、残りは単なる屋上緑化ではカウントせず、連続的に展開するものをカウントするということをはっきり出すべき。
- ・土地利用として地平部やそれと連続した「みどり」をどう確保するか、という話と、壁面緑化などの景観の戦略としてどう取るかを整理するべき。
- ・ひらがなの「みどり」は、これまでにない新しいみどりの考え方を提示したい。こういうものですと書くと、大胆な提案に制約をかけてしまう可能性がある。あまり細かく書きすぎるのではなく、幅広く受け止める書き方をするべきである。
- ・「みどり」については土地利用的視点、景観的視点、それとトータルとしての理念、管理運営の視点のような形で、大きな柱で書いたほうがよいのでは。
- ・水面をどう考えるか、自然面を構成しているものとして、水も「みどり」も防災だけを考えるのではなく、景観や環境問題など総合的に捉えて、豊かな提案を求めるべき。
- ・メッセージ性のある水を区域内に積極的に導入するという考え方は提示し、水面や水路、カスケードといった導入の形態は緩やかな表現でいいのでは。

【まちの景観形成、交通ネットワークについて】

- ・駅のシンボル性に関して示されていない。大阪駅を眺める視点も重要である。
- ・地下駅も同様に、駅のもつシンボル性が発揮できるようなデザインが必要である。
- ・南北軸、東西軸は基本計画を一定尊重するべきである。南北軸の6列植栽も、それ以上に良い提案があればそれにこだわらなくてよいと思うが、前提として基本計画を一定尊重することはぶれてはならないと思う。

【災害に強いまちづくり、環境への配慮／エネルギーインフラの整備について】

- ・最低限の帰宅困難者の収容に加え、自立型のエネルギー確保は重要である。どれだけのエネルギーを自給できるか表現すべきである。

【まちの管理運営について】

- ・「みどり」は、持続的で質の高い管理の仕組みをどう実現するかが重要である。
- ・成功したBIDは事業を拡大して行っている。周辺地区も一体的に管理運営できるような可変

性、拡張性のある考え方とすべき。

【大阪大学名誉教授宮原氏への次回検討会の出席依頼について】

- 中核機能について、本検討会でさらに深度化を図っていくべきであり、この分野に精通した方にアドバイザーとして出席していただく必要がある。大阪大学名誉教授の宮原先生は、ナレッジキャピタルだけでなく、1期計画のマスタープランそのものの検討にも参加されており、本検討会に参加していただければ、可能性を探る上で有益である。
- 委員の方々から、本提案について異論もないことから、宮原先生に次回の検討会へ出席していただくことを依頼することとする。